

「9～10世紀ブルガリアの君主

『ボリス公とシメオン帝』のイコノグラフィ―再論

アクシニア・ジユロヴァ

〔編集部注〕第一次ブルガリア帝国（7世紀後半～11

世紀前半）では、ボリス1世（在位…852～889年）

が、キリスト教に帰依し、国民にも改宗を強いた。

その息子であるシメオン1世（在位…893年～92

7年）のもとで、ブルガリア正教会が確立され、コ

ンスタンティノポリス総主教から独立した。シメ

オン帝のとき、君主の称号を、それまでのハーン

（汗）から皇帝に変え、帝国は領土を拡大。文化的

にも最盛期を実現した〕

国家指導者と宗教指導者を兼ねた「皇帝」

「帝国とキリスト教徒皇帝」という教義、すなわち帝

国の一体性の前提条件としての「神聖君主制」という

思想の神学的基盤を築いた学者は、周知のとおりカエ

サレアのエウセビオス（3～4世紀）であった。彼がキ

リスト教における最初の政治神学者としても知られる

ことは、決して偶然ではない（Farina, 1966: 257; 2003: 197-

304）。彼の政治神学の中心的概念は、帝国とキリスト教

徒皇帝は、天にある父と神のみ言葉（「ロゴス」

の *εἰκὼν*（エイコーン、像）であり *μίμησις*（ミメシス、模倣）

である——すなわち、主は「天にある自身の国」の地上における投影像として帝国を創造した——という考え方であった。

実際、この文脈では、教会と帝国はどちらも神聖なるキリスト教徒の共同体の「像」であるがゆえに、政教一致以外のありかたはありえない。教会と帝国は一緒になってキリスト教共同体を形成する。つまり、キリスト教の帝国は唯一の指導者——キリスト教徒の皇帝——を戴くことしかできないのである。しかし、教会と皇帝を並列するのではなく皇帝の権力を教会のそれよりも上に置く理由は、皇帝が主の「副王」、神のロゴス（み言葉）——（その受肉としての）地上におけるキリスト——の副王であることによる。神のロゴス（み言葉）たるキリストの副王である以上、皇帝は教会よりも上位であり、また総体としての帝国よりも上位にある。神の王国としての地上のキリスト教共同体が帝国と同一視され、神の都が教会と同一視されたのは、偶然ではない。皇帝は、王と司祭と預言者という三重の機能を果たすゆえ、それらを総合した権力を行使する。そ

して皇帝にその力が与えられたのは、彼が神の副王、神のロゴス（み言葉）、司祭にして預言者たるキリスト——の副王だからである。

国家と教会のこの有機的關係（しばしばふたつの権力のシンフォニーと定義される）が最も強く明示されるのは、両権力が同じ目的をもった時である。そのような時代を、われわれは9世紀末から10世紀初めにかけてのブルガリアに見ることができる。そして、ふたつの権力の目的の合一の輝かしい例が、ブルガリアのふたりの君主——ボリス公とシメオン帝——のイコノグラフィ—である。

ふたりの君主——ロシア写本に残る肖像

ブルガリアのこのふたりの支配者の図像は、現存する手稿本に最も頻繁に登場する人物像というわけではない。そもそも15世紀より前の教会エリートに関連した図像は、実質的には現存しないか、あるいはわれわれの知る範囲にはない。古代ブルガリア美術における君主の図像は、一般にビザンツの伝統と直接的な関係

があり (Grabar, 1936, 166-296; Guzelev, 1968) 、そうした図像が広範に見られるようになるのは第二次ブルガリア王国 (1185-1396年) の時代からである。

ブルガリアの諸王の肖像として今まで残っている中で最も有名なもの——1344/45年の「マナッセ年代記」と、1356年の「ロンドン福音書」に収められている——はこの時代に描かれた (Velmans, 1968, 93-148)。なかでも好例と言えるのは、「年代記」の最初の部分にあるイヴァン・アレクサンダル王と年代記作者マナッセの細密画、および年代記最後の部分にある王と家族の肖像、そして「ロンドン福音書」の中の国王一家の細密画である。これらの細密画は従来から学術的研究の対象となっており、すでに2百年近く議論されている。またわれわれがここで論じようとしている「宗教指導者崇拜と比較した君主崇拜」に関係する時代よりも、ずっと後に描かれている。

さて、ブルガリアの王——スラヴ人の王——の現存する最古の肖像画は、9-10世紀のものである。ただし、現存するのは、ブルガリアの手稿本を手本にした後年

のロシアの写本 (11-12世紀) の中の絵だけである。本稿で取り上げるのは、モスクワの「説教福音書」 (Moscow, GIM, Syn. 262) の中のボリス・ミハイル公と、同じくモスクワの「ヒツポリュトスの論集」 (Moscow, GIM, Chudov. 12) の中のシメオン帝の像である (Ivanova-Mavrodinova, 1968, 80-120; idem, 1976, 111-114; Popova, 1975, 28, ill. 9)。

「説教福音書」 (Syn. 262) は最近の年代研究で11-12世紀の作とされている (Ivanova, 2009, 117-156)。その中のボリス公の絵は正面の全身像で、2本の円柱に支えられた半円形の装飾付きアーチの中に立っており、背景は金色に塗られている。右手には十字架を持ち、左手は胸の位置で開いた手のひらをこちらへ向けている。頭には王冠を戴き、そのまわりに後光が描かれている。外衣チュニツクとマントは金糸を使った錦織であり、真珠で飾られている。王冠は当時のビザンツ皇帝がかぶっていたのと同じ型、つまり基部が柔らかく中央に宝石がひとつ付いた「単眼」と呼ばれるタイプである。マントは紫色をしている。頭の両側の文字は「聖ポリ

ス」と読める。

この細密画は、極めてシンプルな彩飾が印象的な論集——冒頭の文字は輪郭が2重線で書かれ、紫に着色されている——に収められて出版された。その手稿本は、2葉目に章頭飾りがなく、また他の細密画も収められていない。この点は、このブルガリア君主の細密画が古ブルガリアの手稿本から写して、後年のロシアの文集に載せられたという説を裏づける論拠のひとつになっている。この図像が写本に収められたのは、ブルガリアの人々をキリスト教に改宗させたという彼の



ロシアの「説教福音書」写本にあるボリス公の細密画



ロシアの「ヒッポリュトスの論集」写本にあるシメオン帝の細密画とその復元図

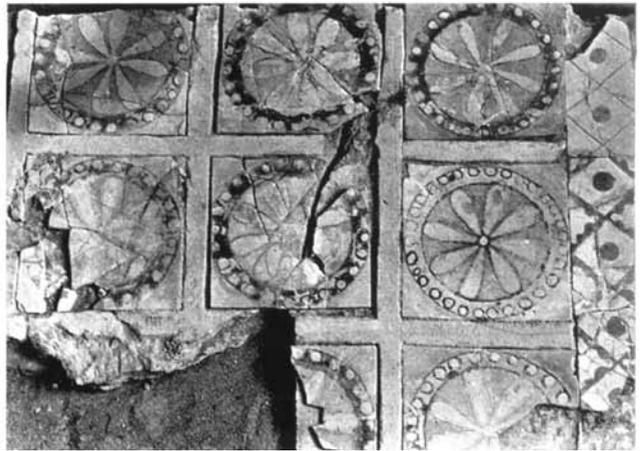


大きな功績に関係している。彼が統治していた時代に、ブルガリアはヨーロッパのキリスト教国ファミリーの

仲間入りをしたのである。

「ヒツポリュトスの論集」(Cmund. 12) 中のシメオン帝の細密画はかなりひどく損傷している。ボリス公の息子であるシメオン帝は、2層構造の円錐状アーチの中に正面の全身像で描かれ、左手には単一ドーム屋根の金色の教会の模型を持っている。マントと靴と王冠は赤、後光は金色である。顔には顎ひげがない。

多くの研究者の意見では(例えば Ivanova-Mavrodinova, 1976, 114を参照)、手に持っているのはシメオン帝の寄進でプレスラフに建てられた円形教会(黄金教会とも呼ばれる)の模型だとされている。この教会は、第一次ブルガリア王国の首都プレスラフを象徴する建物のひとつである。シメオン帝の衣服の装飾的なデザインはプレスラフに今も残る建物の床の白粘土のタイルと壁の装飾に似ており(この点は、この細密画がシメオン帝を描いたものだという説の根拠のひとつである)、また類似のモチーフはビザンツの皇帝たちの衣服にも見られ、東方の織物にとってもよく似ている (Ivanova-Mavrodinova, 1976, 111)。



第1次ブルガリア王国の首都・プレスラフ(ヴェリキー・プレスラフ市)に残るトゥズララカ修道院のタイル張りの床。シメオン帝の細密画(前頁)の衣服の模様と似ている

ブルガリア文化の「黄金時代」を
もたらした父子

ふたりのブルガリアの君主は、なにゆえに有名なの

だろうか？ むろん、スラヴ圏のキリスト教国家の最初のモデルを作り出し、ビザンツ帝国における「教会指導者と君主」の關係に学んで「宗教・世俗権力」の關係を整備したのは、彼らの時代であり、彼らの努力によるのだが――。

汗（ハーン）にして公（クニャス）であつたボリス（生年不明〜907年5月2日）は、852年から889年までブルガリアを治めた。彼の時代にブルガリアの人々はキリスト教に改宗し（864年）、ブルガリア独立教会（自治教会）が生まれ、礼拝には古ブルガリア語とそのアルファベットが採用され、最初のスラヴ・ブルガリア文芸活動の中心が組織された（KNEŽA 3. 1. 1985: 222-233）。この時代はまた、キリスト教の教会の建立もさかんに行われた。例えば、ブルガリアの9世紀の年代記外典には「ボリスは自らが支配するブルガリアの領土全体を7つの大教会で囲い込んだ」という記述が見える。

自国の首都にキュリロスとメトディオスの弟子であるクリメント、ナウム、アンゲラライを迎えたのも彼

の治世だった。クリメントらは大モラヴィア王国のスラヴ人を正教に改宗させることに失敗してモラヴィアから追放され（885年以降）、ブルガリアにやって来た。そこから彼らによるブルガリアでの文化的な伝道活動が始まり、キュリロスとメトディオスが作ったスラヴ語アルファベットが生き延びたのだった。キュリロスとメトディオスの別の弟子たちと多数の聖職者のグループも、プレスラフのコンスタンティンに率いられて、コンスタンティノポリス経由でプリスカ（第一次ブルガリア王国の最初の首都）に到着した。

ボリス公の治世は、文芸活動の中心が2カ所にできた点でも特筆に値する。ひとつはブルガリア南東部のオフリドを中心とするクトミチエヴィツァ地域、もうひとつは首都のプリスカである。クリメントは7年間に3千5百人の学生を教育し、精力的な啓蒙活動を行った。ボリス公という強力な後ろ盾をもつ彼は、聖パンテレイモン修道院と教会を新設し、教会は後に大主教の住居に変わった。また、最初はプリスカで、後にはプレスラフで、ナウムとその弟子たちやクリメント

の弟子たちが活動したことも知られている。クリメントはやがてブルガリア語を使う最初の主教となり（893年）、ブルガリア文学の黄金時代の基礎を築いた。

889年、ボリスは退位してバシリカ（大聖堂）近くの修道院に隠棲した。しかし後を継いだ息子（長男）のヴラデイミル・ラサテは異教（キリスト教以前の土着宗教）の復活をはかったので、ボリスはやむなく893年に君主の地位に復帰した。その結果、ブルガリアのキリスト教は完全に国教として確立された。同じ年、世俗の貴族と高位聖職者と国民の代表たちが出席したプレスラフ教会会議で、ボリスの息子（3男）シメオンが全ブルガリア人の公となることが宣言された。シメオンはコンスタンティノポリスで学んだ後、修道士となる道を行っていたが、修道誓願を放棄して即位したのである。首都は大プレスラフへ移され、ボリス公は再び引退して修道院に入った。

シメオン帝（863／64年頃～927年5月27日）は893年から913年までブルガリアの公（クニャス）であり、913年から927年まではブルガリア皇帝

（ツァール）として在位した（KME, P.C.III, 2003, 591-600）。クレモナの司教リウトブランドによれば、シメオンは非常に若い時に「コンスタンティノポリスで修辭学とアリストテレスの三段論法を学んだ」とされる。彼はマグナウラ宮殿内の学園で学んだと考えられる。この学園は、9世紀後半にカエサレアのアレタスが研究活動に着手し、また後の東ローマ皇帝（マケドニア王朝）コンスタンティノス7世（あだ名はボルフェロゲネトス（緋色の産室生まれ）／帝国史上随一の文人皇帝）が教育を受けた場所である。この環境は「マケドニア・ルネサンス」と百科全書的教育の源であった。

再びリウトブランドを引用するなら、シメオンは「その後、学問をあきらめ、自身の身を——世に言われるように——修道院の禁欲生活に捧げた」。この記述は、ボリス公がシメオンにブルガリアという国の霊的生活を託そうと意図していたことを示す証拠とされている（Bojirov, 1983, 36）。つまり、王家が血縁の人材——この場合は公の息子シメオン——を使って、世俗権力と霊的（宗教的）権力の両方を支配する政策を、自覚的に、

しつかりした基盤の上で行っていたことが見て取れるのである。

しかし、よく知られているように、修道院でのシメオンの隠遁生活は長くは続かなかった。おそらく、キエリロスとメトディオスの弟子たちの来訪を契機として、885年以降、シメオンは彼らの文芸活動に大きくかわっていたと考えられる。首都をプリスカからプレスラフへ移したのも、ブルガリアにとってのプレスラフをビザンツにおけるコンスタンティノポリスにあたる都にしようというシメオンの熱望の表れではないかとされる。かくして、若きシメオンの周囲に、高い教養をもつ人々のサークルが形成された。その中にはオフリドのクリメントとナウム、プレスラフのコンスタンティン、ヨアン・エグザルフ、修道士（チェルノリゼツ）フラバル、聖職者グリゴリイ、トゥドル・ドクソフといった学者や著述家が含まれていた。

シメオンがコンスタンティノポリスで受けた高い教育と、当時のビザンツの首都で生み出されたエリート文化を模倣しようという情熱を考えれば、それも当

然と言えるだろう。例えば古ブルガリア語の文献を見ると、翻訳者たちの優れた力だけでなく、オリジナルの文章の筆者たちの高い能力もうかがわれる。

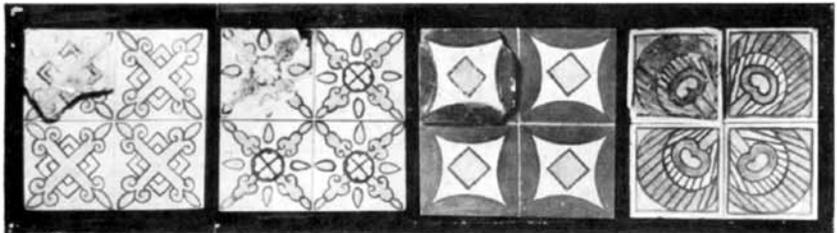
シメオンの野望はキリスト教国の新首都プレスラフとして具現化され、彼はこの都市を、当時の文化的規範の最高レベルであったコンスタンティノポリスやイエルサレムと並ぶものにした。こうした彼の情熱は、研究者たちが「黄金時代」と呼んできた特筆すべき現象を開花させた。支配者や宮廷エリートの求めに応じて翻訳された文献類は、質においてビザンツの最良のものに匹敵した (Džurova, Velinova, 2011, 83-105)。

この時代に翻訳された作品の水準の高さは、古ブルガリア語文学の第一世代を担った人々がギリシャ語と神学文献の両方について優れた知識をもっていたことを証明している。また彼らは、必ずしも自分たちがよく知っていた作品すべてをブルガリア語に訳したわけではなかった。プレスラフの文学活動は驚くほど盛んであった。なにしろ数十年でビザンツの典礼文書と神学文献の主なジャンルをブルガリア語に訳し、スラヴ

語文学全体に永続的に残る説教・教理問答の分野を付け加えたのである。

その実例として、典礼のテキストだけでなく、主要な神学百科全書の数々も挙げるができる。例えば「ヘクサメロン（天地創造の6日間に関する論書）」、歴史学文献、教父たちの著作、修辞学文献と聖人伝、修道士たちの著作「天国への階梯」「アッパ・ドロテウス（ガザのドロテウス）の説教」「パテリコン（教訓集）」「シリアのエフレムの訓戒」などである。

かつてのブルガリア王の図書館にあったキリル文字手稿群のデザインは、ロシアにあるその写本からしか知ることができないが、「ゲラゴル文字の古写本に一般的に見られる地方的なデザインではなく、コンスタンティノポリスの高度な装飾と細密画技法に従って作られた」との説を裏付けている。11～12世紀の「オストロミール福音書」や「ムスチスラフ福音書」、1073年の「スヴェトスラフ（シメオン）の聖句集」など、宮廷の求めに応じて翻訳され装飾を施された手稿本は、9世紀末から10世紀にかけてビザンツの首都で作られ



プレスラフの教会の陶製化粧タイル

た最高レベルの手稿本装飾（なかでも特に彩色ビザンツ様式で装飾された作品）に比肩しうる素晴らしさである（Džurova, 2002）。

プレスラフでは、バシリカ式（長堂式）や交差ヴォールト（穹窿）式天井の教会が精力的に建設された。その頂点をなすのが、皇帝の宮殿から10メートルしか離れていない場所に建てられた円形教会（黄金教会）である。この教会は丸天井の円形建造物に長方形の拝廊と正方形のアトリウム（吹き抜け）が付いた構造で、彫塑や陶製のタイル類で豊かに

装飾されている。議論の余地なくコンスタンティノポリスの教会構造に似ており、その類似については多くの研究がなされている。プレスラフの教会や居住用建造物の床と壁を飾る陶製タイルは装飾の種類が豊富で、手稿本の装飾に比して語られるだけでなく、エナメル工芸品や織物、教会で使う金属器の装飾と比べても遜色がない（Akrabova-Jandova, 1976, 62-80; Totev, 1988）。

当時としては前例のないこの建築面の隆盛は、ギリシャ語から翻訳されたスラヴ語手稿本のジャンルの幅広さや見事な装飾と歩調をそろえて発展したもので、ボリス公とシメオン帝というふたりのブルガリア君主が果たした役割の必然の結果であった。このふたりが、「キリスト教のブルガリア国家にして、スラヴ人の国家」の最初のモデルを設計し、確立したのである。それゆえにこの時代は、「国家と宗教というふたつの権力の意向が一体になった時に、帝王の肖像学（イコノグラフィ）が発達する」という事実を明確に示してくれるのである。

「十字架」や「教会の模型」を手に持つ君主像

「説教福音書」のボリス公は、キリスト教の属性——十字架——を手に持つ姿に描かれ、背景は頂上に十字架の付いたアーチの枠で囲われている。円柱の装飾は、現在もプレスラフに残る10世紀の陶製イコノスタシス（聖障／内陣と至聖所を区切る、イコンで飾られた壁）の柱頭を、そっくり写しとっている。円柱や、ボリス公の頭上のアーチのフリーズ（天井のすぐ下の壁の帯状の部分）のデザインも、上述の陶製イコノスタシスのコピーである（Bulgaria in the Byzantine World, 2011, ill. 48）。こうした類似の好例は「ヒツポリュトスの論集」の中のシメオン帝のダルマティカ（聖職者の外衣）の装飾に見られ、特にロゼットの模様がプレスラフの床の模様と似ていることが知られている。シメオン帝の絵姿がビザンツのイコノグラフィのパターンにならって描かれ、手に教会の模型（彼が建てた黄金教会）を持っているのは、偶然ではない。

ふたりの君主の政策の合致、つまりボリス公が目覚



プレ斯拉フの教会の陶製のイコノスタシス（聖障）

めた君主とされて、キリスト教の信仰の強化を目指す彼の活動は息子のシメオンに継承されたことを示す証拠は、トゥドル・ドクソフ修道士による以下の記述に見ることが出来る。

「アタナシウスの書と呼ばれるこれら信仰の書は、われらがシメオン公の命により、メトデオスの弟子

にしてモラヴィア大主教たるギリシャの主教コンスタンティンによって、世界の創造から6414年日（西暦906年）、第10インディクティオ（インディクティオは、かつて使われた「15年」を表す年代単位）の年に、スラヴ語に翻訳された。同公の命により、6415年（907年）、ティチャ川の河口にて、それらの書の写本がトゥドル・ドクソフによって作られた。その地は、公が新しい聖黄金教会を建てた場所であった。同じ年の5月2日土曜日の夜、公の父にして神の謙虚なしもべであり主イエス・キリストへの真の信仰に生きてこられた方が逝去された……」

近年、「説教福音書」と「ヒツポリュトスの論集」の中のブルガリア君主の絵を、ロシア（キエフ大公国）の公だったボリスとグレブの画像と結び付けようという試みがある（Uhanova, 2009, 117-136）。しかし、この説は、この分野の専門家たちの従来多くの見解や論拠との整合性を欠く（Filimonov, 1875, 51-53; Svirin, 1950, 20, 24; Lazarev, 1953, 476-478; Šcepkina, Protasieva, 1958, 15; Golj'shenko, 1959, 394, 407, 412-415; Ivanova-Mavrodinova, 1968, 108-110;

Vzdornov, 1980, 16-17; Džurova, 1981, 26; Guzelev, 1985, 228; Prohasjeva, 1980, 10; Popova, 1983, 23; Maslencyn, 1998, 92-93; Gorskij-Neostnuev, 1859, 409; Sreznnevskij, 1867, 47-48)。そればかりでなく、それらの細密画を収めた部分のテキスト自体が疑いなく古ブルガリア語の書き方やモデルに従っているという事実とも矛盾する。この点、2枚の細密画が収められているのは、どのような書物なのかの研究が重要である。

「説教福音書」(Syn. 282)は、日曜日の教会の説教を集めた本である。この手稿本は9世紀末に、メトデオスの弟子であるプレ斯拉フのコンスタンティンによって編纂された。もう一方の「ヒツポリュトスの論集」と呼ばれる書物(Chudov 12)には、ヒツポリュトス主教が語った「キリストとキリスト反対者について」と「預言者ダニエルへの注釈」の説教が収められている(Ivanova-Mavrodinova, 1976, 116, 117)。つまり、ブルガリアの王を描いた細密画は、その本のテキストとは特に関係がない。にもかかわらずそこに王の絵があるということは、出版を委嘱した人物であるとした説明のしよ

うがない——すなわちブルガリアのボリス公とシメオン帝、そして後の時代の写本であれば、11-12世紀のキエフ大公国の公である(Uhanova, 2009, 135-136)。

この細密画に関する最も古い時期の記録はフィリモノフが残した記述で、それによれば、シメオン帝の絵の背景は青色で教会の模型は金色であった。つまり、この記述は、シメオンがプレ斯拉フのティチャ川の河口に「新しい黄金の教会」を建てたという上記の引用と符合している。シメオンと同時代に生きた古ブルガリア語の著述家であるヨアン・エグザルフも、壁に描かれ彩色されたシメオンの画像に関する情報を残している。これはおそらく黄金教会内の彼の画像のことであろう。黄金教会ではモザイク床に使われた青と緑の四角いダイスが見つかっており、この2色はまたプレ斯拉フの他の複数の教会のモザイク床にも使われている(Ivanova-Mavrodinova, 1976, 118-119)。

ここまで、第一次ブルガリア王国時代に作られて今に残る古代ブルガリア語の手稿本オリジナルとそのロシア写本について述べてきたが、それらを思い起こし

て考えると、君主の肖像画を含む問題の2編の手稿本は両方が一緒になって独特な「キリスト教哲学的コレクシオン」をなしており、マグナウラの学園の卒業生たるシメオン帝の高い学識との一致を示していることが明らかになる。シメオンはおそらく個人的意思により、自身の宮廷に豊富なキリスト教文献の蔵書を備えようと努力した。当時はブルガリアの人々の改宗が進められていた時期であり、このようなモデルは民衆の日常的な典礼の必要に見合ったものではなく、ふだんの教会の礼拝での使用のためにはもう少しわかりやすい実用的な典礼書の作成が必要であったが、それはまた別の問題である (Dzhurova-Velinoва, 2011)。

ブルガリアのふたりの君主の肖像の精緻さは、当時の他の細密画、例えば「スヴェトスラフの福音聖句集」(1073年)の正面像や、色彩豊かなビザンツ様式で描かれた「オストロミール福音書」と「ムスチスラフ福音書」(11〜12世紀)の絢爛豪華な装飾などに見られる高い水準と一致している。

絵に描かれたブルガリアの君主が手に持っている品

は、何を象徴しているのか? 「ヒツポリュトスの論集」でシメオンが左手に持つ教会は、ビザンツの皇帝を描く時によく描かれるアイテムであり、教会(この場合は円形教会)の建設を命じたり寄進を行ったりした行為を表している。ボリスの右手の十字架は単なる殉教のシンボルではなく、彼が啓蒙的な公として自国の民を大いなるキリスト教の家族に仲間入りさせたあかしであり、さらに君主の勝利の象徴でもある。

両方の王の頭の後ろの後光は、ビザンツでもスラヴ圏でもイコンを描く際には珍しくない技法である。この技法はコンスタンティヌス大帝の時代以来、つまり4世紀以来使われており、聖人だけでなく存命中の王族にも用いられた。シメオンとボリスの後光は、彼らが神聖な存在と見なされていたことを表現している。

この2点の王の絵が間違いなくブルガリアで最初のものであることを支持する論拠として、ふたりのキリスト教君主——ボリス公とシメオン帝——を描いたものであることを支持する論拠として、筆者はあまり知られていない9世紀末〜10世紀初めのギリシャの手稿本を加えたい。また、「ヒツポリュトス

の論集」に収められた絵の中のシメオン帝のダルマテイカ（外衣）のロゼット模様（Chudov 12）は、プレスラフ

の陶製装飾にも見られる。今から50年前（1945年）、考古学の発掘によりプレスラフの教会の床が発見されたが、その床のタイルは円形の枠の中に8葉が配された図柄で、シメオン帝のチュニツクの装飾モチーフと同じであった。「209・210頁の下段の画像を参照」

似たデザインは、古ブルガリア語の作品が作られたのと同時代である10世紀のギリシヤの手稿本でも珍しくない。例えば10世紀前半のBodl. Barocci 181 (f. 4) 10世紀中葉のBodl. Auct. T. 3. 2. (f. 2) (Hutter, 1982, ill. 10-11) 10世紀末のGIM, Synod. Gr. 134 (Vlad. 164) (ff. 2, 108v) (Fonkić, Poljakov, 1993, 64) Add. 11300 (f. 84) v Laur. Plut. IV. 29 (f. 122v) Paris gr. 139 (Weitzmann, 1996, 38, 43, X, 47) 10世紀中葉のKorcha 92のマルコ福音書第130葉の章頭飾り (Džurova, 2011, ill. 81) などである。アーモンドの葉のロゼットも、10世紀のギリシヤの多くの手稿本に見られる。例えばKorcha 92 (f. 210) の四福音書のうちルカ福音書の章頭飾りや、プレスラフの

陶製装飾などである (Džurova, 2011, I, 99-111; II, ill. 83; Navrodinov, 1959, fig. 294-296; idem, 1976, ill. 137, 140)。

「説教福音書」のボリス公の絵 (Synod 262) で、ダルマテイカの金色の地の上に描かれている鮮赤色の装飾は、いわゆる「レース」様式（ドイツ語でLaubsägestil「ラウプゼーゲシュティール」と呼ばれる）で描かれた手稿本の装飾タイプと様式的特徴が似ている。レース様式の手稿本は10世紀に現れたが、ビザンツを象徴する色彩豊かな花柄様式（やはり10世紀に始まって、比較的長く残った）と比べると短命に終わった。ここで強調すべきは、ギリシヤの10世紀の手稿本で知られているような本物のレース様式がスラヴ語手稿本に現れた例は、現時点でひとつも知られていないという点である。しかし、ボリス公のダルマテイカにそれが見られるという事実、最も古い時期の彩色スラヴ語書物——古ブルガリア語手稿本——の系譜の中で、一連の部分が回復不能なまでに抜け落ちて失われてしまったことを物語っていると言えよう。

そしてまた、それがビザンツ皇帝の肖像を模倣した

ボリス公の服の図柄に登場しているという事実は、当時ブルガリアの宮廷でビザンツの肖像画を見ることができ、それを手本とする習慣があったことの証拠である(ビザンツ皇帝の肖像については、例えば皇帝ニケフォロス3世ボタネイアテスがイオアンニス・クリュソストモスおよび大天使ミカエルと一緒に描かれている1080年のCoinage 79 (2a) を参照)。

王の姿の周りに配された円柱とアーチを覆う装飾は、9世紀末から10世紀の最初の数十年にギリシャの手稿本——例えばKorcha 92の四福音書や「メッシーナの福音書」F.V.18——で用いられたのと同じ装飾である(Džurova, 2011, I, 99-111; II, 123-131; Jacobini-Perrin, 1998)。同様のことは、後光とアーチと衣服の輪郭の点描にも言える。これは9世紀から10世紀にかけて好まれたモチーフであった。

スラヴ語文化圏の規範を創造

このように、ブルガリアでキリスト教国家というモデルが形成された9世紀末から10世紀の最初の数十年

にかけて、最初のふたりの支配者すなわちボリス公とシメオン帝は、コンスタンティノポリスをモデルにして、国政と宗教界の両方で高い学識をもつエリートの子育成を目指し、力を注いだ。現存する一連の古ブルガリア語手稿本(原本)や、11〜12世紀に作られたロシアの写本をもとに現在復元が進められている手稿本は、古ブルガリア語に丁寧に翻訳された哲学書や教義書の一群が存在したことを証明している。訳された書物は典礼書だけでなく、終末論の本や解釈書、典礼と教義の規則書、さらに年代記的な情報を含む書物も含まれていた。これらの文書コレクションは、ブルガリアに高い教育を受けた君主と博識の修道士たちがいたことの証拠である。

当時は、国家の君主にとっても教会の長にとっても、キリスト教に改宗して間もない国民に、キリスト教徒としてのアイデンティティを確立させることを目指した時代である。そのためには日常的な典礼のための手稿本を作る必要があると同時に、国家の高官や高位聖職者たちのニーズを満たすための手稿本も必要だった。

その高官や高位聖職者たちこそ、ビザンツの伝統にならってスラヴ語文化の最初の記述スタイルを創造した人々であり、そのモデルが以後、他のスラヴ語圏の人々が従う規範となっていたのである。

国家と教会の方針のこうした一致は、残念ながら、それ以後の時代に再び実現されることはなかった。なぜなら、ビザンツによる支配（1018～1185年）、十字軍、ラテン帝国による支配（1204～1261年）、さらにはオスマン帝国による支配（1393～1878年）など、さまざまな歴史的出来事が起こったからである。そうした状況が国家と教会の関係を変化させた。14世紀末までは国家が優先事項であり、その後は国家が消滅したため、5百年にわたって教会が「民族アイデンティティと信仰の守護者」の役割を果たさねばならなかった。しかし、キリスト教国家モデルが形成された最初の時期、少なくとも最初の数十年間（9世紀末から10世紀前半）には、共通の目標が国家と教会の同調を——ふたつの権力のシンフォニーを——運命づけた。それゆえに君主は、「説教福音書」と「ヒツポリュトス

の論集」の絵がそうであるように、右手に十字架を持って教会を寄進した啓蒙者として描かれると同時に、後光がさした姿、つまり聖なる人として描かれた。そしてそうした描き方は、他のスラヴ語圏国家で君主を描く際のひとつのモデルとなったのである（例えば聖ボリスと聖ゲレブのイコノグラフィ）。

シメオンの文化・文学活動は、ビザンツ皇帝のイデオロギーに全面的にならって「皇帝の冠と総主教の笏を手に入れる」という政治的野心と結びついていた。そして、ビザンツ皇帝のイデオロギーの中核原理は「帝国 (*imperium* インペリウム) と祭司権 (*sacerdotium* サケルドティウム)」すなわち「*imperium sine patriarcha non tenet*」——総主教なくして帝国なし」だったのである。913年、シメオン公のブルガリア皇帝としての戴冠と同時に、初代ブルガリア総主教の叙任が行われた。

10世紀初めのシメオン帝の治世は、文学と文化が驚くほどの急発展を遂げた時代であり、ビザンツ文明をブルガリアの文脈に適合させて取り入れ、そのビザンツ文明を通じてスラヴ語世界の統合に貢献したことで

知られる。

「ヒッポリュトスの論集」でシメオン帝が黄金教会の建造者として描かれているのは偶然ではなく、その原形はソロモン王の黄金の神殿にある。シメオンはキリスト教に改宗してから日が浅いブルガリアの人々の国家・宗教指導者として——神の副王、ロゴス（み言葉）たるキリストの副王として——描かれた。これは、3〜4世紀にカエサレアのエウセビオスとコンスタンティヌス大帝が作り出して以来続くビザンツの政治神学の精神に完全に従っている。9世紀末から10世紀初めにかけてのブルガリア国家の歴史においては、「神聖なる国家」という理念が他のすべての上に君臨していたゆえに、シメオンはそのように描かれたのであった。ボリス公とシメオン帝を描いた2枚の細密画は、その事実をはっきりと物語る表象である。

（小見出しは編集部による）

参考文献

- Акрѡвова-Жандѡва, 1976 = Ив. Акрѡвова-Жандѡва,** Прегледњакѡта рисуѡвана Трапезна ќерамиќа, in : Преспав, Сборник II, Софија, 1976, 62-80.
- Войѡов, 1983 = Ив. Војќиљов,** Цар Симеон Велиќи (893-927), Златнијат век на Буглѡрија, Софија, 1983.
- Bulgaria, 2011 = Bulgaria in the Byzantine World,** Soѡa, 2011, 20.
- Džurova, 1981 = A. Дѡуроѡа,** 1000 години буглѡрсќа рѡкописна ќниѓа, Софија, 1981.
- Džurova, 2002 = A. Дѡуроѡа,** Byzantinische Miniaturen. Schätze der Buchmalerei vom 4. bis 19. Jahrhundert. Mit einem Vorwort zur deutschen Übersetzung von Peter Schreiner. Schnell + Steiner, Regensburg, 2002.
- Džurova, 2011 = A. Дѡуроѡа,** Manuscripts grecs enlumines des Archives Nationales de Trana (Ve-XIve siècles). Études choisies, I-II, Scriptorium Balcanicum, Soѡa, 2011.
- Džurova, 2011 = A. Дѡуроѡа,** Le Rayonnement de Byzance. Les manuscrits grecs enlumines des Balkans (Ve-XVIIIe siècle). Catalogue d'exposition (XXIIe Congrès d'Études Byzantines) Soѡa, 22-27 août 2011, Soѡa, 2011 (avec la collaboration de Paul Janart).
- Džurova-Velinoѡа, 2011 = A. Дѡуроѡа, V. Velinoѡа,** Byzantine Literature and Codex in the Reflection of the Slavic Tradition. Once more on the Relations Model — Recipient —

- in: Proceedings of the 22nd International Congress of Byzantine Studies (Sofia, 22-27 August 2011), Volume I, Palany Papers, Sofia, 2011, 83-105.
- Farina, 1966 = R. Farina**, L'Impero e l'imperatore cristiano in Eusebio di Cesarea, Zurich, 1966.
- Farina, 2003 = R. Farina**, La "preas" del servo di Dio Costantino Imperatore: santità e culto di Costantino Imperatore nella "Vita di Costantino" di Eusebio di Cesarea, in: Poteri religiosi e istituzioni: il culto di San Costantino tra Oriente e Occidente, Torino, 2003, 297-304.
- Filimonov, 1875 = Г. Д. Филимонов**, Иконные портреты русских царей, in: Вестник Общества древнерусского искусства при Московском Публичном музее, 1875, № 6/10, 51-53.
- Fonkic-Rojakov, 1993 = Б. Д. Фонкич, Ф. Б. Поляков**, Реческие рукописи Московской Синодальной библиотеки, Москва, 1993.
- Golyschenko, 1959 = В. С. Голышенко**, Вопросы об изображении князя в Чуловской рукописи XII-XIII вв. – Проблемы источникововедения, VII, Москва, 1963, 45-64.
- Gorskij-Nevostruev, 1859 = А. В. Горский, К. И. Невострев**, Описание славянских укописей Московской Синодальной библиотеки. Отд. 2. 2., Москва, 1859.
- Grahar, 1936 = A. Grahar**, L'Empereur dans l'art byzantin, in: Recherches sur l'art officiel de l'Empire d'Orient, Paris, 1936, 166-196.
- Guzlevy, 1968 = В. Люзелев**, Княз Борис I, София, 1968.
- Guzlevy, 1985 = В. Люзелев**, Борис I, in: Кирило-Методиевска енциклопедия, т. 1, София, 1985, 222-233.
- Hutter, 1982 = I. Hutter**, *Corpus der byzantinischen Miniaturhandschriften*, II, Oxford, 1982.
- Iacobini-Pertta, 1998 = A. Iacobini, L. Pertta**, *Il Vangelo di Dionisio. Un manoscritto bizantino da Costantinopoli a Messina* (Milan, SRAB, 4), Argos 1998.
- Ivanova-Mavrodinova, 1968 = В. Иванова-Мавродинова**, За украсата на ръкописите от Преславската книжовна школа, in: Преслав, Сборник I, София, 1968, 80-120.
- Ivanova-Mavrodinova, 1976 = В. Иванова-Мавродинова**, Украса на ръкописите, in: Преслав, Сборник II, София, 1976, 62-80.
- KME, 1985, 2003 = Кирило-методиева енциклопедия**, А-З, I, София, 1985; П-С, III, София, 2003.
- Lazarev, 1953 = В. Н. Лазарев**, Живопись Владимира Суздальской Руси, in: История русского искусства, т. 1, Москва, 1953.
- Maslepinch, 1998 = С. И. Масленицын**, Живопись Владимиро-Суздальской Руси, 1157-1238 годы, Москва, 1998.
- Mavrodinov, 1959 = Н. Мавродинов**, Старобългарското искусство. Изкуството на Първото българско царство, София, 1959.

- Pertta-Iacobini, 1995 = L. Pertta, A. Iacobini**, Il Vangelo di Dioniso. Il codice F.V.18 di Messina, l'Alfos Slavonikita 43 e la produzione libraria costantinopolitana del primo periodo Macedone, in: RSVN, 31 (1994) [1995], 81-163.
- Rorova, 1975 = O. Rorova**, Les miniatures russes du XIe au XV siècle, Leningrad, 1975.
- Rorova, 1983 = O. С. Попова**, Русская книжная миниатюра XI-XV вв. – Древнерусское искусство. Русь и страны византийского мира, XII в. СПб., 2002, 344-364.
- Szelepcsiki, 1867 = И. И. Срезневский**, Древнее изображение Всеволода-Гавриила, in : Сведения и заметки о малоизвестных и неизвестных памятниках XIV в. СПб., 1867, вып. СХХ.
- Šerckina-Protasieva, 1958 = М. В. Шеркина, Т. Н. Протасьева**. Сокровища древней письменности и старейшей печати. Обзор рукописей русских, славянских, греческих, а также книг старой печати Государственного Исторического музея, Москва, 1958.
- Swijn, 1950 = А. Н. Свириц**, Древнерусская миниатюра, Москва, 1950.
- Totev, 1988 = Т. Тотев**, Преславската керамична школа, София, 1988.
- Шанюча, 2009 = Е. Уханова**, Древнейшие изображения князя Бориса. К истории библиотеки Владимира Мономаха, in : Collectanea Vorisogolebica, выпуск I, Paris, 2009, 117-156.

Velmans, 1968 = T. Velmans, Le Portrait dans l'art des Paléologues, in : Art et société à Byzance sous les Paléologues, in : Actes du Colloque organisé par l'Association Internationale des Études Byzantines à Venise, en septembre 1968, Venise, 1968, 93-148.

Yzdornov, 1980 = Г. И. Яздорнов, Искусство книги в Древней Руси. Рукописная книга Северо-Восточной Руси XII - начала XV в., Москва, 1980.

Weitzmann, 1996 = K. Weitzmann, *Die byzantinische Buchmalerei des 9. und 10. Jahrhunderts*, Berlin, 1935 (germ.). Addenda und Appendix, Wien, 1996).

(Ахима Дзупова / профессор
 大学院・ヒザメライン研究所前所長)